ルコソ哀ナレ、〇略下

〔走衆故實〕一永祿參二月六日壬寅、午刻御參內有之、〇略中今日雨降、御輿舁には代之者、傘を指懸候由に候、昔はすげ笠を著候と云衆有之如何、御物のゆたんは其まゝ雨にぬれ候つる、

〔好色一代男五〕ねがひの搔餅

京より結構なる伊勢參りがあるわと門立騷ぎ、練物を見る如くぞかし、〇略中何れも十二三なる娘の子、四つがはりの大振袖、菅笠に紅裏打つて、綯交の紐を附け、〇略下

〔昔昔物語〕天和貞享の比、編笠次第に止、菅笠に成、御旗本中あみ笠の時分は、菅笠は、陪臣かぶり、御旗本菅笠の時は、編笠陪臣かぶる、元祿の比より押なべて菅笠に成し、下々は酷暑にもかぶる事なし、〇略中

一兩年以來、瀨川風とやら云て、瀨川菊之丞と云堺町の役者、女方の役者の眞似とて、帶を立むすびにして、菅笠は、いたゞきの笠あてを、甚ダ高くして、笠のふち頂より上へ上るやうにしてかぶる、大身の奧方、幷供女、何も一樣に仕立ありく衆、餘程見ゆる、歷々衆が、河原者の眞似するゆへ、小身末々まで、夫を學ぶなり、菅は水邊に生ずる故、自然と日を不通、夏の笠は菅より能はなし、

〔骨董集上編中〕女の編笠　塗笠

元祿のはじめは、菅笠をもはらかぶりたるならん、

其袋嵐雪撰、元祿三年刻、

菅笠や男若弱たる花の山　百里

當時は、男の菅笠かぶりたるは、似合しからざりし歟、

〔近世女風俗考〕葛笠菅笠の事